

LS5/1のネットワーク部



LS5/1 上段

周波数特性は40 ~ 13000Hz ±5dB、38cmウーファーとソフトドームのトゥイーター（2個使用）の2ウェイ構成で、クロスオーバーは1.75kHz。ウーファーのサイズは30cm口径よりも38cm口径の方が、高域特性に優れている理由で採用されている点がユニークである。38cmウーファーと2個搭載されているトゥイーターは、位相干渉による音像の肥大を防ぐために、3kHz以上では、1個のトゥイーターをロールオフさせている（トゥイーターのカットオフ周波数は1.75kHz）。LS5/1はリーク製のEL34プッシュプル専用アンプ（後期はラドフォード製のEL34のプッシュプル）が用意されていてキャビネットの台の部分に搭載できるようになっている。また、そのまま鳴らしたのでは高域のレスポンスがなだらかに低下してゆくの、高域補正用の回路が搭載されていた。



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎月テーマとなるブランドを取り上げている。

第17回 BBC Monitor Speaker system

BBCモニターとは、放送局からの送り出し周波数(1958年当時は50Hz ~ 15kHz)の音質をモニタリング再生する目的で規格化され、ライセンス製造されているスピーカーの俗称。当時BBCには、D・E・L・ショーターという、スピーカー専門の優秀な研究家が在籍しており、彼は1946年にBBCが発行しているクォーター「スピーカーの過渡特性の測定とその視覚的提示方」という論文を発表するなど、英国でのスピーカー研究の第一人者だった。そして1950年代の後半には、ワーフェールに在籍していたレイモンド・E・クックが外部スタッフとしてBBCモニターの開発チームに加わる。スピーカーの基本性能を解析、理論的に設計していくスタイルと、当時のスピーカーメーカーの多くがそうであった、勘と経験に頼った、いわゆる職人的な設計スタイルでBBCモニターは開発されてきたのだ。

BBC Monitor LS5/1

1958年、LSのナンバーが与えられたBBCのスタジオ・モニタースピーカーとして最初の記念碑的モデル。同年4月に、英国電気学会誌に発表した、モニタースピーカーに関する実際的な研究発表論文の中に実例として挙げられているスピーカーが、BBC放送局独自の開発になるモニタースピーカーの最初のモデルであるLS3/1、そして、今日のBBCのモニタースピーカーの源流といえるLS5/1であった。

本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

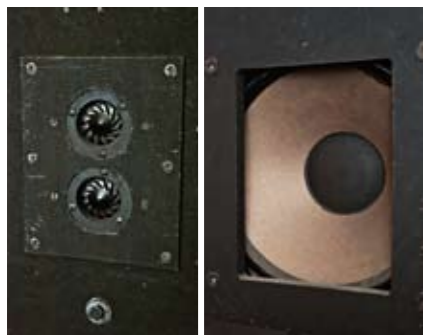


Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

BBC Monitor

(1950年代後期)

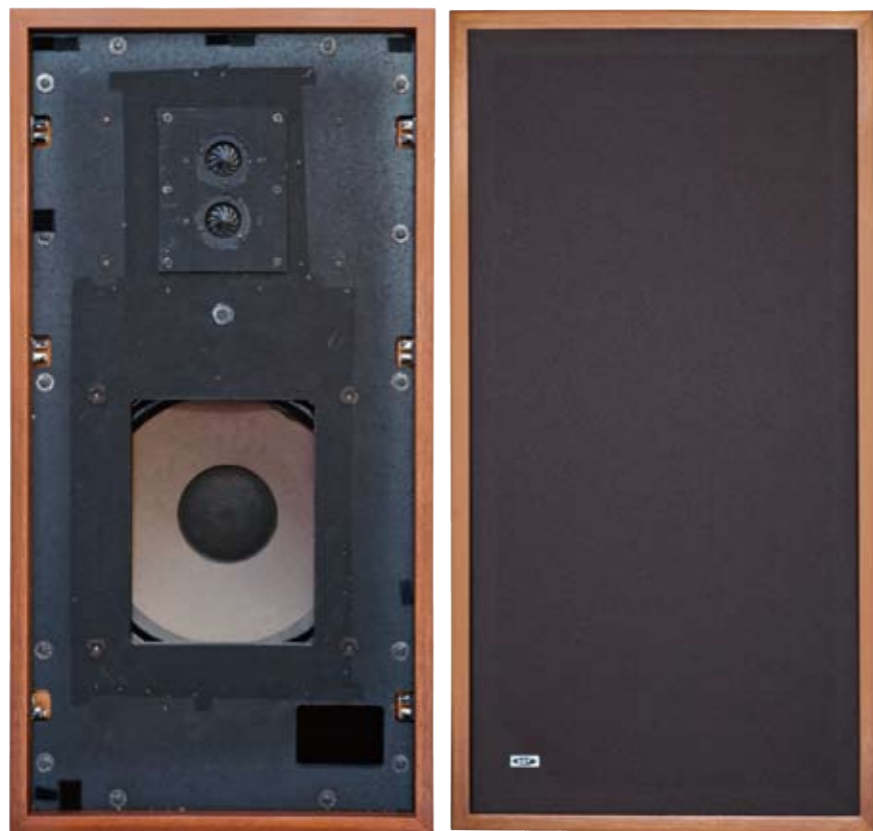


2個搭載されている
トゥイーター

ウーファーの長方形の
バツフル開口部

LS5/1A (KEF Model) 下段

LS5タイプは1961年にユニットが改良され1Aタイプとなるが、箱のサイズ、ユニット構成は全く同じ。LS5/1は後面バツフルが取り外し可能だったが、LS5/1Aは正面バツフルが取り外せるようになっている。当時すでにBBCの研究所では指向性の問題に気付いており、ウーファーをバツフルの裏から固定し、バツフルの開口部は円にはせず、横幅18cm、縦30cmくらいの長方形とすることで、水平方向の指向性を改善している。これは初期型のLS5/1にも採用されている構造だ。このモデルも金属製の専用台が用意されていて、アンプが搭載可能になっていた。この改良モデルのLS5/1Aの製造権を手に入れたのは、後にクックが創立したKEFであり、BBCへの納入も独占していた。



久しぶりにアトリエJe-teeの倉庫へ高速を飛ばして向かう。倉庫に行くときは、大物試験に間違いない。ところが本日のテーマは「BBCモニター」だ。となるとKEFなのかロジャースなのかハーベスなのか。いずれにせよ小さいスピーカーなのだろうか。なぜ倉庫なのか。

建物に入っすぐ、さあ聴いてくださいと置いてあったのがLS/1というモデルだった。ウーファーはRCA製38cmだ。こういうモニターがあったとは。BBCモニターをコンシューマーにも売られるようになったのはずつと後の話で、これは英国内の放送局数増えアルファからいしか作らなかつたという。だから珍しい。厳しいBBCの規格を通ったモニター。しかも38cmウーファー。聴く前からもう間違いないと思えた。左右の幅はウーファーギリギリの寸法で、ばかに大きくないのもいい。スタンドがスピーカーと一体型でアンプを格納するための棚がついている。

英国つながりでビートルズの『ラバーソウル』、そしてジュディス・オウエンの女性ヴォーカルを聴く。むしろちゃや滑らかできめ細かい。そして現代的。50年代半ばの設計・製造でこの音はないでしょうといつも似たようなことを口走っているがやっぱりそうだった。重要なポイントはウーファー。といっても帯域的にはフルレンジといってもいいかもしれない。この振動板がとびきり

BBC規格で、38cmウーファー 聴く前から間違いないと思った

薄い。触っただけでズボツといきそう。このウーファーが古くささを感じさせず、テンポよく軽快に音楽を奏でる。もつさりさせるような不純物がない。こういう湿度感が低い音だとアト・ペツパの『ミーツ・ザ・リズム・セクション』のような西海岸のジャズはばっちり決まった。ヌケがいいというのはこういう音なんだと思う。

オーケストラもオペラの声も付帯音が極少で、そのプレーンなテイストはあくまでもモニターとして音源をチェックするための機能性を意識させる。次にその5、6年後に出てきたKEFモデルのLS5/1Aを聴く。ユニットの構成は同じだが、ウーファーがグッドマンでトゥイーターがセレスティオンになった。本格的にエレクトリック楽器の時代を迎え、コンサバティブになったうだ。低音音に対応するために、ウーファーの質量が増し全体の重心が下がった。よく言われる英国スピーカー独特の陰影感が出ている。だから時代的にドンピシャのビートルズを聴くとジョン・レノンの甘ずっぱい哀愁がよりしみ出してくる。

岡田さんは初期モデルが好きだという。スピーカーはもうこれしか置けないというなら後期型だろう。そしてサブとしてセットし、ある特定の音楽はどんなスピーカーも負けないぞという使い方ができた初期型だ。相当ぜいたくな話だけど。